

うんてい

(うんてい復刊) 第5号

平成25(2013)年3月31日

地図を捨てる

館長 千田 稔

私のように歴史地理学を専攻してきた者にとっては、地図資料が仕事場にたくさんたまっていく。特に国土地理院刊行の地形図は、あちこちに出かけるたびに購入するから、かなりの枚数となる。それを地域別に整理して、いつでも取り出せるようにするには、それなりの工夫がいる。九州とか四国などといった地域名を書いた箱に分類するか、あるいは、マップケースに収納するとかという方法は、誰でもやることである。ところが、地図が増えるほど、本の置き場を侵略してくる。

地理学をやっている人間にとって、地図は必須のものとして、教えられてきたし、実際地図がなければ成り立たない研究分野である。大げさに言えば、地図は地理学研究者の命のようなものである。だが、近年になって、各地の図書館で地図がデジタル化されて、手元に地図がなくても、パソコンの画面で見られるようになったし、この方法は、今後ますます進展していくと予想できる。それならば、私の職場から地図類、とくに地形図などを捨てる

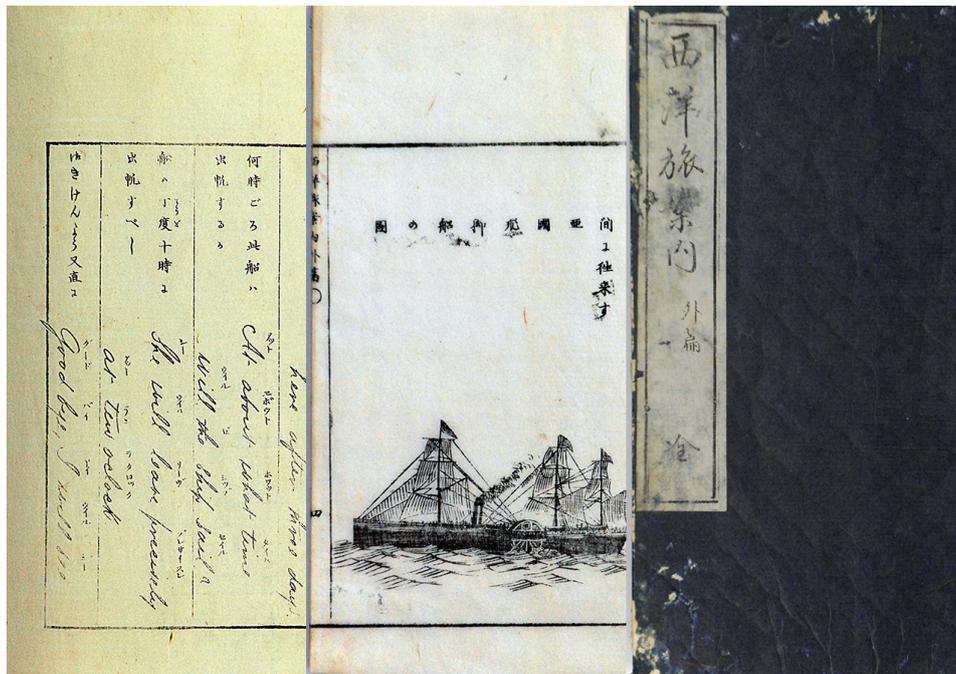
と決意した。決意というほど、たいそうに思えるのは、地図は命と教えられてきたことが、頭から去らなかったからであろう。ところが、現在の私は、歴史地理学とどの程度かかわっているのかという思いがこみあげてきて、苦笑するのをさけられなかった。

地図を捨てて、気分が楽になったのが、正直なところである。再び、大げさに言えば、私は地図という束縛から脱して、自由に飛翔できるという快感が心に満ちるような気がした。

人生でもそうであろう。いつまでも、決められた「地図」に従って歩かされるほど苦痛なことはない。親や先輩、あるいはその筋の専門家が作った「地図」を頼りにして、自分自身の道はみつからないと、悩みつづけながら、人生の終着点に向かう。そのような「地図」は、勇気をもって捨てるのがよい。まして、人生の道を「カーナビ」に導かれるほど馬鹿げたことはない、だが、今、そのような若者が増え続けている。あえていうならば、進学校も、「人生のカーナビ」のようなものだ。

Contents

- ・ 巻頭言 地図を捨てる 1
- ・ 所蔵資料紹介『西洋旅案内 外篇』 2
- ・ 図書館の事業紹介「市町村支援サービス」 3
- ・ 『古事記』関連資料紹介-図書館の所蔵資料から- 4
- ・ 公文書館機能について「地域に残る歴史資料を保存すること」 5
- ・ 地域資料から「吉野郡下市村永田家文書~歴史資料調査ボランティアの活動紹介~」 6
- ・ システム更新について 図書館業務システム・アトリエMacintoshを一新 7
- ・ コラム「芸亭院」開創1250年顕彰・図書館振興研究集会報告 7
- ・ 奈良のもの・ひと⑤ 川路聖謨と佐保川堤の桜 8
- ・ 図書館情報館で調べる レファレンス事例紹介 <第5回> 9
- ・ イベント掲示板 10



【所蔵資料紹介】

◆吉田賢輔 編『西洋旅案内 外篇』（尚古堂）明治2（1869）年

徳川幕府は、欧米列強の外圧により「鎖国」から「開国」へと政策を転換し、慶応2（1866）年には「学科修業又は商業」目的での海外渡航も解禁する。幕末の動乱期、幕府だけでなく長州や薩摩などの諸藩も、欧米の文化・科学技術受容のため使節、留学生などの海外派遣に踏み切っていた。

海外への関心が高まり交流が進むなかで、海外渡航者向けの啓蒙書も刊行されるようになる。その嚆矢となったのが、慶応3（1867）年、福沢諭吉が米国での幕府軍艦受取の旅から帰国した後に執筆した『西洋旅案内』で、その続編ともいえる『西洋旅案内 外篇』は、翌々年の明治2（1869）年に尚古堂から刊行された。

編者は、吉田賢輔。洋学、儒学ともに通じ、幕府の譜代外国奉行調役兼儒者を務めた人であるが、旧幕臣であることの節を曲げず明治政府の頭職に就くことはなかった。福沢諭吉とは、幕府外国奉行の同僚で、慶応義塾の立ち上げや諭吉の『西洋事情』、『西洋旅案内』などの著作でも盟友として助力したという。本書巻首に記された賢輔の肩書きが「慶応義塾同社」となっているのは、発行当時塾長兼教授の職にあったからである。

本書は、横浜から出航するアメリカ船、イギリス船、フランス船や「雇船」（チャーター船）の行き先、出発日・便数、航路やドル・ポンド換算した旅行費用のこと、船中での心得などを具体的に解説する旅行ガイドブックである。また、船中や洋行先で言葉が通じない不自由さを考え、「世界中にて第一広く用ひらる…英吉利語」の会話事例も載せている。この会話事例は、全体の半分近くの丁数を占めており、それぞれに発音が仮名振りされ会話帳の趣さえある。

例えば、乗船時のことでは、「何時此蒸気船ハ此を出帆するか」は“^{ホエン ウィル ゼ スチームル リーヴ}When will the Steamer leave here ?”と示され、食事の際の「皿をかへ魚肉をあたへよ」は“^{チェンジ マイ プレート エンド ギヴ ミー フィッシュ}Change my plate and give me some fish”と紹介されている。また、気分が悪くなり「部屋までいしやをよびよせ」たい時は、“^{ステワード}Steward, ^{アスク}ask the Doctor ^{ドクトル}to come to my ^ツcabin.”といった具合である。このように、船中で想定される食事や病気を始め様々な事柄・事態から下船時のことまで実に詳細に用例が載せられている。

諭吉の『西洋旅案内』は、世界地理、船旅に関わる様々な情報知識やさらには外国為替、保険制度まで解説しているが、本書には、諭吉の案内書には見られない英会話集があり、先行書を補うことも意識して書かれたのではないかと思われる。この外篇も、海外渡航が命がけであった当時の海外旅行者にとっては重宝な一冊であったにちがいない。

なお、本書は、Web上の国立国会図書館「近代デジタルライブラリー」や早稲田大学「古典籍総合データベース」などでデジタル画像を閲覧することができる。

- 【参考文献】 ● 由良君美「ある儒者の転身：吉田賢輔の場合」（『國文學：解釈と教材の研究』21巻10号）1976年
● 西出勇志「ニッポン洋行御支度史：ガイドブック 6」（『日本の古本屋メールマガジン』97）

（森川 博之）

図書館の事業紹介 「市町村支援サービス」

図書館が県立図書館として、奈良県内の市町村へ支援を行っているサービスをご紹介します。

◆県内の各市町村へ、毎週資料を届けています

図書館から、奈良県内の市町村の決まった場所各1か所に、毎週資料を届けています。主に図書館に届けていますが、図書館が無い町村へは、公民館図書室や役場などに届けています。これは基本的に、図書館の資料を借りたい方が、各市町村の窓口で申し込まれ、その資料を届けているものです。1冊からでも申し込めます。図書館は県立ですので、市町村図書館では持っていない専門的な資料なども多くあります。図書館が遠い方などは、ぜひ、お近くの市町村の窓口で申し込んで、図書館の資料を取り寄せてください。もちろん無料です。

◆図書館で借りた資料を各市町村の窓口で返却することもできます

資料の貸出しや返却は、コンテナに入れ、宅配で行き来させています。大き目のコンテナですので、実は図書館からの貸出し資料だけでなく、図書館等へ配布する文書の搬送も、このコンテナを使って、効率よく行っています。図書館から市町村へは、図書館が貸し出す資料が入り、逆の図書館行きの便には、返却される資料が入るわけですが、この返却資料が入るコンテナを使って、図書館で直接借りられた本を、市町村の図書館等で返しても、図書館に届けられるようになっています*。また、市町村図書館が持っている本を、図書館で借りる資料も届くようになっています。奈良県には、当館を含めて31の図書館がありますので、多くの図書館の資料を1か所で受け取れるシステムにもなっています。

*「遠隔地返却サービス」。各施設の開館時間に窓口のみ受け付けています。一部利用できない町村があります。詳細は図書館へお問い合わせください。

◆図書館で行った図書展示の本をそのままセットで貸出しています

図書館では、毎月さまざまな図書展示を行っています。例えば「時代小説を愉しむ」と題した展示は、池波正太郎や藤沢周平、浅田次郎、宇江佐真理などの作品を約300冊展示しました。紅茶やコーヒー、ティータイムのお菓子の本を170冊集めた展示「ほっとティータイム」や、がんについての正しい知識を得て、早期発見早期治療に役立つような本270冊を集めた展示「がんと向き合う」など。これらの資料を、基本的に展示をしたそのままのセットで、市町村に貸出しをしています*。図書館で

行った展示を市町村で同じように行うことができます。これらの資料は市町村の窓口からその利用者の方に貸していただくこともできますので、ぜひご活用いただきたいと思っています。

*一部貸出していない資料があります。

◆図書館が無い地域などへは、小学校と中学校へ本をセットで貸し出しています

子どもの成長に欠かせない読書を支援するために、図書館が無い地域などの小学校と中学校へ、子どもの本100冊を1セットにして、1回3か月の貸し出しをしています。セットの種類は、絵本のセットと読物のセットの2種類です。合わせて3セット(300冊)までを貸出していますので、児童や生徒の数に応じて、組み合わせてお借りいただけます。「図書館の本が来た!」ということで、学校図書室や読書のPRにもお役立ていただけたと思います。学校では、その本を児童・生徒に自由に貸出いただけます。

◆図書館同士が力を合わせてレファレンス(調査相談)を行っています

図書館で重要な業務の一つに「レファレンス」というものがあります*。これは知りたい・調べたいことがある方に必要な資料や情報を調べて提供する、調査相談業務です。たとえば、「足袋の作り方が知りたい」「江戸期に奈良から幕府に献上されていたという御所柿について詳しく調べたい」といった様々なご質問にお応えできる資料や、Web上の情報などを提供しています。中には、なかなか情報がないものもあり、1つの図書館だけでは答えが見つからない場合もあります。市町村の図書館でまず調べてすべての情報が集まらない場合、図書館に追加調査の依頼が来ますのでさらなる調査を行い、2館で情報提供をさせていただきます。この2館でも情報が揃わない場合はさらに国立国会図書館に調査を依頼することもあります。様々な図書館が力を合わせて調査のお手伝いをさせていただいています。

* p9で、当館のレファレンス事例の紹介をしています。

以上のような様々なサービスからもお分かりいただけると思いますが、各市町村関係施設の窓口と図書館はつながっています。また図書館を通じて県外の図書館と協力することもあります。1つの窓口に行けば、複数館のサービスが受けられるお得感をお知りいただき、今後ますます図書館等の施設のご活用をいただきたいと思っています。

(北森 亜由美)

『古事記』 関連資料紹介-図書館の所蔵資料から-

現存する最古の書物『古事記』は、平成24（2012）年に完成して1300年を迎え、我が国最初の古典としてあらためて注目を集めています。関係する地域においては様々なイベントも開催されています。古事記は、平安時代から中世にかけては、正史である『日本書紀』に比べ、あまり注目されず、朝廷や寺院において講義や註釈、写本が細々と行われていたといわれています。近世に入りその資料的価値を発見したのが、本居宣長でした。宣長の半生を掛けて著した『古事記伝』（全44巻）をはじめ、国学を中心に研究がすすめられた近世は、古事記の詳細な校訂や訓読を通して註釈がなされるという文献学的な研究が主なものであったようです。これに対して、明治維新後は西欧の諸学問の導入により、歴史学、神話学、国文学など幅広い分野で研究が深められました。

大正期には、「大正デモクラシー」という時代背景の中で、歴史学者による『記』『紀』の実証主義的な研究や民俗学、比較神話学の分野においてより多様な研究成果が、世に出されています。

しかしその後、戦時体制が強まるなか、国の成り立ちを説くテキストの一つとして取り上げられ、古事記にとっては不運な時代も経験することになります。

このような時代を経て、古事記の自由な研究が可能になったのは戦後のことになります。国文学や古代文学、伝承文学の諸分野における研究を含めて、歴史学や比較神話学、文化人類学からのアプローチや、思想史や心理学など類縁の分野においても取り上げられることになりました。

以下に所蔵する古事記関連の資料の中から、近代以降の代表的な著作を何点か紹介します。

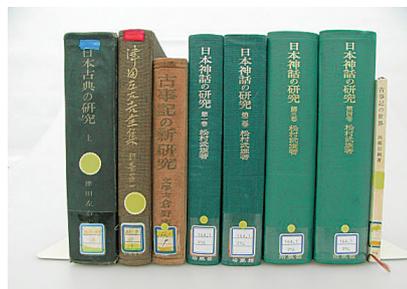
■『古事記及び日本書紀の新研究』：歴史学者の津田左右吉（1873-1961）によって著された記紀の研究書。大正8（1919）年に洛陽堂から刊行。記紀の研究法や古事記と日本書紀の相違点、両書における旧辞・帝紀の検討など精緻な分析を行っています。同書はその後改訂され大正13（1924）年に『古事記及び日本書紀の研究』（岩波書店）として刊行。改訂本の本文は昭和21（1946）年に刊行された『日本古典の研究 上』（岩波書店）の中に収録されています。（当館では『日本古典の研究 上』（岩波書店、昭和23（1948）年）、『津田左右吉全集』別巻1（岩波書店、昭和41（1966）年）を所蔵）。

■『古事記の新研究』：国文学者の倉野憲司（1902-1991）が二十五歳の時に著した著作で、倉野の古事記研究の出発点となった研究書といわれています。至文堂から昭和2（1927）年に刊行。古事記の叙事詩的な文学性について詳細な論究を行っていま

す。倉野は主要な古事記註釈書の校訂に関わり、ライフ・ワークとして取り組んだ註釈書『古事記全註釈』（全7巻）をはじめ多数の古事記関連の著作があります。

■『日本神話の研究』（全4巻）：日本神話の科学的な比較研究書。著者は神話学者の松村武雄（1883-1969）で、昭和29（1954）年～33（1958）年、培風館から刊行。第1巻は序説篇で、日本古典神話の全体的性質、研究法等を述べ、第2巻の個分的研究篇上では天孫系神話、第3巻の個分的研究篇下では出雲系と筑紫系神話、第4巻の総合研究篇では古典神話の全体的特徴について研究の成果をまとめています。著者の神話研究の集大成といえる著書となっています。

■『古事記の世界』：国文学者で古代文学研究者の西郷信綱（1916-2008）は、本書において古事記を理解するため、「古事記の世界に実践的に入り込んで、古代人と親しく交わり」、「（古事記の）本質をその本文のふところにおいて読み解くこと」を目指しました。文化人類学的な視点を援用し、古事記内部の構造を読み取とることを試みた作品で古事記入門書として最適な名著といえます。岩波新書の一冊として昭和42（1967）年に刊行されました。



近代以降の著作

『古事記』は、日本人のこころの原点を探る上で欠かせないテキストであり、1300年間読み継がれてきました。その魅力やエネルギーは、今後どのように人々と関わり、影響を与えていくのでしょうか、そのテキストは未来の人たちにどのように読まれ、受け入れられていくのでしょうか、今後も古事記にゆかりの深い地の図書館として、出版情報に注意しながら、継続した収集につとめていきたいと思えます。

【参考文献】

- 久松潜一編『古事記大成1 研究史篇』平凡社 1956年
- 斎藤英喜『古事記 不思議な1300年史』新人物往来社 2012年 ほか

（鈴木 陽生）

公文書館機能について 「地域に残る歴史資料を保存すること」

図書情報館は、「県の中核的な公共図書館」、「様々な情報の創造・提供・仲介を行う情報センター」、「奈良県の歴史・文化に関する専門図書館」という3つの機能を持ち合わせており、図書情報館として開館してから、8年目を迎えています。

当館では、「奈良県行政文書管理規則」「奈良県教育委員会行政文書管理規則」により移管を受けた行政文書をはじめ、奈良県に関する歴史資料として価値を有する古文書やその他刊行物などの資料を受け入れ整理し、保存しています。

公文書は、県の知事部局や、教育委員会、各出先機関から5年以上の保存期間が満了した資料で歴史的価値があると思われるものを選別し、収集しています。この制度は、平成14年度から始まり、平成13年度以前の保存満了文書から始めて、毎年移管されるようになりました。

昨年度は、本県の公文書を368点移管収集、現在、所蔵する公文書の本数は、約12,500点になっています。

この他、図書情報館の前身である、旧県立奈良図書館が所蔵していた、県庁舎建て替えの際に移管されたものやその後奈良図書館が購入したものを引き継いだ文書があります。これらは、明治・大正期、昭和前期の公文書で、県庁起案文書を中心として、添上郡、山辺郡、生駒郡、北葛城郡、南葛城郡等県内10郡役所の文書を含めて総数として約8,200点があります。中でも、明治・大正期の奈良県行政文書

6,695点については、その資料的価値や重要性が認められ、平成21年3月に県指定文化財に指定されています。内容は、奈良県という地域性を反映して、社寺関係が多く、その他鉄道関係、国宝や文化財関係、陵墓関係、諸組合関係、学事関係など多岐にわたっています。一部は、デジタル化され、当館ホームページ上で公開されています。

これらの公文書は、主に研究者や学生によって、調査研究を目的として利用されていますが、地域の住民が、地元の寺社の由来や歴史調査のため「寺院明細帳」を繰ったり、「社寺財産登録一件」「神社明細帳異動 移転合併ニ関スル件」など、寺社関係資料を詳細に閲覧されることもあります。

また、古文書や絵図も数多く所蔵しています。古文書は、寄贈されたものや寄託しているものも含め約80文書群があり、当館の貴重書庫で厳重に保管されています。江戸時代の奈良町奉行所与力であった玉井定時およびその子孫の著述ならびに写本など全78巻の寄託文書「玉井家文書」や、「大和国高市郡醍醐村森川家文書」のような寄贈文書、「大和国葛下郡三倉堂村樫根家文書」のような購入文書などがあります。

絵図は、江戸期の「奈良町絵図」や、デジタル化もされている「奈良町実測全図」などの詳細な絵図があり、古い時代の街並みや、地名を知ることができる貴重な資料となっています。

このように図書情報館では、奈良県という地域の歴史を知るための様々な資料を所蔵し、利用者皆さんのご要望に応えるとともに、県内のどこかにひっそりと眠っている新たな地域の歴史を知るうえで貴重な資料の発掘と収集に努めています。

(松村 順子)



貴重書庫内の様子



金峯山吉野山参詣名所之図

地域資料から「吉野郡下市村永田家文書～歴史資料調査ボランティアの活動紹介～」

図書情報館は奈良の歴史や文化の情報発信基地として、地域研究支援サービスを積極的に行っています。奈良県関係の図書や雑誌などを収集するほか、公文書・古文書・絵図などの歴史資料を収蔵し、学術的調査研究などを目的とした閲覧請求に応じて資料の提供をしています。

当館のホームページ内に「ふるさとコーナー」(<http://www.library.pref.nara.jp/furusato/index.html>)を設けています。ここから所蔵する公文書・古文書・絵図を検索したり、デジタル化された資料をパソコン上で閲覧することが可能です。また所蔵する古文書を資料群ごとの一覧でご覧になることができます。

現在、当館が所蔵する古文書は整理済みのもので、およそ28,000点です。葛下郡上牧村の牧浦家文書など県内の村方文書を中心に、奈良奉行所の与力の玉井家文書、中條家文書、添下郡下三橋村の今西家文書、郷土史家藤田祥光氏が収集した藤田家文庫文献資料など多様な古文書を収蔵しています。また、現在整理中の資料として、平成21年度に当館へ寄託された下市の林業家の永田家文書があります。この古文書は当館の古文書講座修了者によって整理が行われています。

当館では、歴史資料として価値を有する行政文書や古文書などの保存を行っている図書情報館の公文書機能をより広く知ってもらうための取組みの一環として、所蔵する奈良県関係の古文書や和古書、公文書を活用した古文書講座を実施しています。平成18年度に入門講座から始まった講座は、平成24年度には入門・初級・中級・上級の4講座を開講しました。これらの講座は、古文書を解読するための知識や技能の習熟を目指していますが、それと同時に当館の所蔵する古文書などの歴史資料の整理・保存・調査作業の一端を担い活躍することのできる人材養成の場ともなっているのです。

こうして古文書講座を修了した方々によって組織されているのが歴史資料調査ボランティアです。現在、ボランティアの人数は約15名で、当館の公文書・地域研究担当スタッフの指導・助言のもとで、毎月二回調査・整理作業に従事しています。古文書整理は、古文書整理カードを作成し、封筒または短冊状の紙に請求記号ラベル・バーコードラベルを貼り、文書表題等を記入します。こうして整理された古文書は中性紙箱に入れて、館内の貴重書庫に収納しています。

現在、整理を進めている永田家文書は、主に明治～大正の林業家永田藤平・藤兵衛と、その林業・製材業をはじめとする諸事業に関連したものです。『日本人名大辞典』によると、永田藤平は奈良の下市に



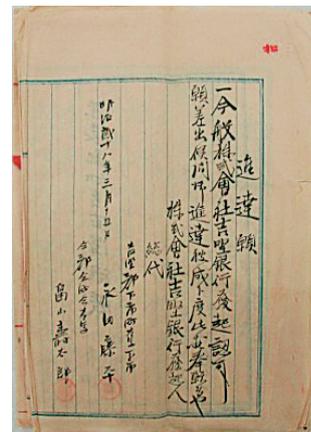
歴史資料調査ボランティアの活動の様子

生まれ、当地の戸長をへて、大和15郡併合時に大阪府会議員となり、明治20(1887)年再設置された奈良県の県会議員を務めました。吉野川に石柱鉄梁による千石橋の架設、吉野銀行(南都銀行の前身の一つ)の創設など奥吉野地方の開発に尽力した人物です。またその長男藤兵衛は、家業の林業、製材業を継ぎ、明治36(1903)年奈良県会議員、38年吉野銀行頭取になっています。大正3(1914)年には吉野桶木会社の創設、4年の洞川電気索道の設立に関わるなど、奥吉野地方の木材資源の開発に力を注ぎました。

整理済みの永田家文書の中から、株式会社吉野銀行の創設関係の資料をご紹介します。明治28(1895)年3月、総代永田藤平を含む20人の発起人により当時の奈良県知事に宛てて吉野銀行設立認可の進達願が出されたことが確認できます。同年6月には下市の西迎院において創業総会が開かれ藤平が初代の頭取に就任していますが、文書群の中には頭取選挙票や、取締役・監査役などの重役選挙の書類などもあります。吉野銀行創設当初の状況がわかる貴重な資料です。

永田家文書は、整理が済んだものから図書館システムに随時登録していますので、検索・利用していただけます。今後も、多くの方々に地域資料を活用していただけるようにより一層努力していきたいと考えています。

(松田 憲子)



吉野銀行設立認可進達願控

システム更新について 図書館業務システム・アトリエ Macintosh を一新

館内設置のパソコンの使用環境については、開館後毎年利用者からの御意見を参考に、随時改善を行なっています。今年度は図書館業務システムの更新と、アトリエのMacintoshを一新したほか、セミナールーム、オーサリングルーム、アトリエのAdobe Creative Suiteのバージョンを更新しました。

● 図書館業務システム更新

図書館業務システムを更新し、携帯OPACから新たに貸出中資料の状況確認、貸出延長、予約中資料の状況確認、予約取消ができるようになりました。

また、国立国会図書館サーチ（NDLサーチ）へ当館の図書目録のデータをOHL-PMHで提供する機能を追加し、NDLサーチへ図書情報館の資料情報を毎日更新（現在は平日月曜日から金曜日の夜間に更新）できるようになりました。

● アトリエのMacintoshを更新

アトリエに設置しているMacintosh端末を更新しました。ディスプレイが21inchから24inchワイドに、OSもMac OS X10.8 Mountain Lionとなり、最新のものとなっています。

Microsoft Office2011（Word、Excel、PowerPoint）のほか、コンテンツデザインソフトとしてAdobe Creative Suites 6 Design Premium（InDesign、Photoshop、Illustrator、Flash、Dreamweaver等）を、動画編集ソフトとして、FinalCut Proを、またMORISAWAフォントを御利用いただけます。スキャナ、フィルムスキャナも新しくなりました。

● コンテンツデザインソフトを更新

セミナールーム、オーサリングルーム、アトリエのAdobe Creative Suite Design Premiumのバージョンを5から6に更新しました。



新しくなったMacintosh

利用環境が少し変更されたものもありますが、簡単パソコン教室や、ITサポーターの方による講習会を実施、計画していますので、御参加いただければと思います。

今後も、社会の動向や御意見、提案等を踏まえながら、より使いやすいものとなるよう、随時改善をおこなっていきたいと考えています。

● 適切にご利用を

一部の利用者の方には、不適切なサイトへの閲覧を試みたり、キーボードやマウス、ヘッドホンの乱暴な取扱いをされる方がおられるようです。図書館は公共の場所です。適切にご利用をお願いします。また、備品は、県民皆様の財産です。大切に取り扱いください。

（川畑 卓也）

「芸亭院」開創1250年顕彰・図書館振興研究集会報告

石上宅嗣によって設立された我が国最古の公開図書館といわれている「芸亭院」の開創1250年を記念し、開創顕彰と図書館振興を目的に平成24（2012）年5月10日から2日間の日程で研究集会が開催され、全国から約230名が参加しました。

初日は奈良ロイヤルホテルを会場に、まず映画作家の河瀬直美氏が記念講演をされ、続くパネルディスカッションでは、東京大学大学院教授の根本彰氏をコーディネーターに、馬場基氏、平井良朋氏、吉田栄治郎氏、田窪直規氏のパネリスト4氏による議論が展開されました。

2日目は41名の参加で視察が行われ、まず石上宅嗣卿の旧宅「芸亭院」伝承地近くに建立されて

いる芸亭院顕彰柱、続いて天理大学附属天理図書館前の石上朝臣宅嗣卿顕彰碑を訪れ、最後に同図書館にて研究集会の記念展示「史料でたどる記紀・万葉の世界と大和めぐり」を見学し、参加者は1250年前に想いを馳せました。



（中西 玄）

●奈良奉行・川路聖謨

明治42(1909)年3月15日の『東京朝日新聞』朝刊「今日の歴史」欄に、42年前の今日が川路左衛門尉聖謨(1801-1868)の命日であると紹介されています。同じく3月15日が命日のジュリアス・シーザーよりも先に掲載されていますから、当時彼の名は人口に膾炙していたのかもしれませんが。

しかし、江戸時代末期に勘定奉行や外国奉行などを歴任し、対露外交で日本側全権の一人として日露和親条約に調印した川路聖謨について、現在の全国的知名度はあまり高くないのではないのでしょうか。

その彼が奈良奉行を務めていたのは、黒船が来航する前の弘化3(1846)年から嘉永4(1851)年、江戸幕府第12代将軍徳川家慶の時代でした。

●日記『寧府紀事』

彼は奈良奉行時代、江戸の母への近況報告を『寧府紀事』という日記形式で綴っており、宮内庁書陵部に残されています。

そこには、身の回りで起きた出来事のほか、江戸と奈良との違いなどについても多く書かれていて、例えば「ならには辨當べんとうかりといふことあり」と、弁当を持ってピクニックに行く風習を、幽閑なことだと珍しがっています。

また、奈良の民衆には4月8日から八朔(8月1日)まで昼寝をする習慣があって町中が深夜のように寝静まったそうですが、不思議なことに店の物が盗まれないばかりか、その時間帯に下女を買い物に行かせると、店の人が「ふくれつらする」と驚いています。この日記からは、当時のおおらかな奈良の様子が伺えます。

●遺書の言葉

奈良では名奉行と人々に謳われて離任時に見送り人が国境まで満ちあふれるほどの人気を博し、その人柄はロシア人たちにも気に入られ、プチャーチン提督の秘書官だった作家イワン・ゴンチャロフをして「この人物を尊敬しないわけにはいかなかった」と言わしめた彼ですが、文久3(1863)年に隠居し、新政府軍の江戸総攻撃予定日だった慶応4(1868)年3月15日の朝、割腹後に短銃で喉を撃って果てました。享年68歳でした。

彼の遺書には奈良奉行時代の回想も含まれており、自らが行った施政について「専ら後年のことをはかり候」と記しています。

そのような方針のもと、強盗取締りの強化や裁判

の渋滞解消、貧民救済のための基金設立などが行われたのですが、今の私たちがその一端に触れることができるものに、桜・楓の植樹運動があります。

●植桜楓之碑

荒れていた興福寺・東大寺の両境内への植樹を計画した彼は、まず率先して両寺に桜と楓を奉納し、寺社や町民にも協力を呼びかけました。すると一乗院・大乘院の両門跡をはじめ多くの町民が協力し、わずか2か月で数千株の桜や楓が両境内に植えられ、さらには高円および佐保地域にまで植樹地が広がったそうです。

嘉永3(1850)年3月、この時の次第を彼の書によって刻まれた「植桜楓之碑」が建てられ、興福寺五重塔の南西、五十二段の脇に現存しています。

現在、当館前の佐保川を2km少し遡ったあたりに、この植樹運動で植えられたと伝わる桜の古木が数本残っており、川路桜と呼ばれて親しまれています。

佐保川堤の桜並木は長さ数kmに渡って続いていて、開花シーズンにはまさに「弁当狩り」をする人たちが賑わいます。

もしかすると、当館から見える桜は川路桜の子孫樹かもしれません。



川路桜

【主要参考文献】

- 「ジャパンナレッジ+」(2013/01/30アクセス)
- 『東京朝日新聞』1909年3月15日朝刊「今日の歴史」
- 日本史籍協会編『川路聖謨文書』東京大学出版会 1967-1968年
- 奈良市史編集審議会編『奈良市史 通史3』奈良市 1988年
- ゴンチャロフ『ゴンチャロフ日本渡航記』雄松堂書店 1969年
- 鎌田道隆「奈良奉行川路聖謨の植樹活動について」(『奈良史学』20号) 2002年

(中西 玄)

◆一般資料から◆

Q：日本が初めて万博に参加したのはいつでしょうか。またそのとき何を出品したのでしょうか。

A：「万博」と略称でよばれることの多い国際博覧会（万国博覧会）は、「国際博覧会条約」という条約に基づき博覧会国際事務局（BIE）による登録または認定を受け開催されるものです。日本では、1970年の「日本万国博覧会」（大阪万博）から「2005年日本国際博覧会」（愛・地球博）まで過去5回万博が開催されています。

万国博覧会の歴史は1851年にロンドンのハイドパークで行われた第1回ロンドン国際博覧会に始まります。当初はロンドンとパリの交互開催でしたが、後に米国の都市も開催地に加わり、主に欧米の先進国で科学技術や文化などが展示紹介されるようになります。1928年にはパリで国際博覧会条約が署名され、改正を重ねながら、開催に関する条件や展示する物品など詳細が定められてきました。

日本が初めて万博に登場したのは1862年のロンドン万国博覧会ですが、このとき出品されたのは、駐日大使として日本に滞在していたオールコックの収集品であり、日本が正式に参加、出品物を展示した最初の万国博覧会は1867年の第2回パリ万博です。幕府は時の将軍徳川慶喜の名代として弟の昭武をパリに派遣します。また、出品内容を、武器・服飾類、美術工芸品、草木・金石・陶器・雑貨類、古器類に分けて収集することとし、目付や勘定所にこれを担当させ、古器類については江戸商人に委託収集させました。さらに、百姓町人、各藩にも出品を募り、佐賀藩と薩摩藩がこれに応じました。

パリ万博では、武器、漆器、陶器類、図画・書画、書籍、衣服などが出品されました。幕府と江戸商人らが各々1,000点余、佐賀藩、薩摩藩は各々500箱前後に及ぶ品々を収集したようです。具体的な出品物は、原本である『仏国博覧会御用留』に収められた出品目録に修正を加えたものが『明治期万国博覧会美術品出品目録』に掲載されています。

このときに出品された数々の美術工芸品が西洋人の日本への関心と呼びさまし、やがて起こるジャポニズムの契機となりました。

【参考資料】

- 國雄行『博覧会と明治の日本』吉川弘文館 2010年
- 伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館 2008年
- 東京国立文化財研究所美術部編『明治期万国博覧会美術品出品目録』中央公論美術出版 1997年

（徳山 さおり）

◆地域資料から◆

Q：奈良奉行の人達（家臣）は奉行が連れてきたのでしょうか。現地採用や奉行所直属もあったのでしょうか。郡山藩士も含まれていましたか。

A：奈良奉行は最初の50年間奈良出身の中坊秀政・時祐の親子がその職にありました。中坊秀政は当初自分の家臣に奈良奉行所の仕事を分担させていましたが、中坊時祐の時代、慶安3（1650）年に与力六騎、同心三〇人が配属されるようになりました。この措置によって、中坊家臣に幕府から給米を支給されることになり、与力・同心として位置づけられ、家臣が与力・同心を兼ねる形になりました。寛文4（1664）年に土屋利次が奈良奉行として赴任すると、与力2人、同心10人が残された他は、中坊奉行の辞職とともに奉行所から引き上げていきましたので、このときに陣容が大きく変わったことになります。

与力の中で大和国内の武士であったことが分かるのは、橋本氏と十楚氏と玉井氏です。橋本氏は小泉藩の藩士、玉井氏は大和郡山藩の藩士、十楚氏は大和の葛上郡の国侍であったといえます。このうち玉井氏は中坊奉行の時から与力ですが幕末まで続く与力の家です。橋本氏も玉井氏より少し遅れて与力になりますがこの家も幕末まで続きます。このほか奉行に随行して新たに奈良へ到来した与力もおります。以降は、奈良奉行所付の与力・同心と奉行の家臣は分離し、奉行が替わっても与力・同心は替わらず、奈良奉行所付の与力・同心として家も固定していきます。欠員があれば補充されることになりますが、与力・同心の出身がはっきりわかる例はそんなに多くありません。

【参考資料】

- 杉田善雄「幕藩制成立期の奈良奉行」（『日本史研究』212号）1980年
- 奈良市史編集審議会編『奈良市史 通史三』奈良市 1988年
- 『奈良市歴史資料調査報告書（17）』奈良市教育委員会 2001年
- 鎌田道隆「江戸時代の南都奉行所と法隆寺」（『奈良史学』25号）2007年
- 水谷友紀「奈良奉行所における行政組織形成の萌芽」（『資料館紀要』第38号）2010年

（大宮 守友）

イベント掲示板

■音楽・アート

図書情報館では、昨年度から、地域の生涯学習や情報発信の拠点として、佐保川まちづくり塾を開講し、それを記念した「佐保川の春 音楽の日・アートの日」を開催しています。



さくら青空アートフィールド

今年度の音楽の日では、庭園を活用した音楽ライブ「さくら青空アートフィールド」をはじめ、「大阪フィルハーモニー交響楽団団員によるクラリネット五重奏コンサート」、「片岡りさ箏コンサート」、そして高校時代、日本音楽コンクールチェロ部門で優勝し、一躍注目され、将来を嘱望される奈良県出身の若手チェリスト伊東裕さんのコンサートシリーズ「伊東 裕プレゼンツ～「奏春のとき」第1章～」など、多彩なラインナップで、音楽との新しい出会いを演出しました。



クラリネット五重奏コンサート

アートの日では、「奈良から表現する」を考える”をテーマに、『奈良のデザイナーが選んだ奈良の一品』や奈良で活動する表現者を一堂に紹介する『100 no arawasi』パネル展など、二ヶ月にわたるリレーアート展を開催しました。



『100 no arawasi』パネル展

また、平成20年以来毎年来演いただいている奈良県出身のチェリストで東京交響楽団首席チェリストの西谷牧人さんの新しいコンサートシリーズ「奈良にゆかりのある音楽家とのコラボレーションコンサート」も始まりました。昨年度は、大震災の影響で来演できなかった西谷さんは、4月、11月の2回、満を持しての演奏会となりました。いずれも奈良県出身のソリストで、4月はピアニスト新居由佳梨さんと、また11月はバンドネオン奏者北村聡さんとのデュオコンサートでした。



西谷牧人・北村聡デュオコンサート

その他、4～5月にかけて開催された島崎古巡画文展「水彩巡礼」では、会期中、武久源造さんのチェンバロと山口眞理子さんのヴァイオリンによる記念バロックコンサートが開催されました。

いずれのコンサートでも、ブックリストで関連図書や資料の紹介を行うなど、図書館らしい取り組みも行っています。さまざまな機会に新たな出会いと新たな情報への入り口を開くこと、図書情報館こそそれにふさわしい発信拠点だと考えています。

■ますます充実する定期イベント

7年目を迎えた千田稔館長による館長公開講座「図書館劇場」も、「史書と文芸の奈良・大和路」をテーマに、6回講座を開催しています。



館長公開講座「図書館劇場」

また、奈良県出身の落語家 桂文鹿さんプロデュースによる図書館寄席も4年目。「花鹿乃芸亭（はなしかのうんてい）」として“語られる書籍”の醍醐味の発信を続けています。特に今年度は各回とも特別企画をプログラムを加え、ひと味違う落語会となりました。



花鹿乃芸亭特別企画「節談説教を聞く」

また、相談事業も済生会奈良病院瀬川院長による「医療・健康相談会」、「法務無料相談会」、「司法書士による法律相談」を開催しており、関係資料の提供もあわせて行い、専門分野と図書館をつなぎ、気軽に相談できる展開を目指しています。

公立図書館では初めて開催を始めた知的書評合戦「ビブリオバトル」も2年目となり、開催回数も26回となりました。新たな本との出会いを楽しんでいます。

さらに、奈良県出身の童話作家 花岡大學の作品朗読会「花岡童話を愛でるつどい」、岩手・花巻の方言で語る「賢治の世界」など多彩なラインナップで利用者の好奇心を触発しています。



大安寺本堂で「暁天ビブリオバトル」開催

また、「シゴトヒト3days II」フォーラムでは、6名のゲストと県内外からの参加者が、相互の想いを共有しながら新たな人繋がりをつくるユニークな場となりました。引き続き多彩なプログラムが続きます。



シゴトヒト3days II

■企画展示・図書展示

さまざまな関係機関や団体、企業とタイアップして開催される企画展。社会の動向にも素早く対応し、所蔵資料をさまざまな切り口で紹介する図書展示。今年もいろいろな仕掛けで、来館者を触発しています。

(主な企画展)

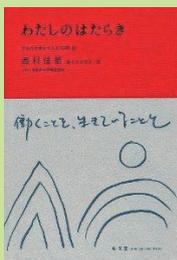
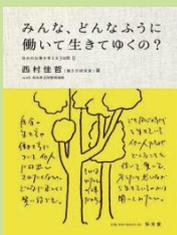
- ・ 島崎古巡画文展「水彩巡礼」(4/24～5/13)
- ・ 奈良県・新潟市歴史文化交流協定締結記念「會津八一と奈良」展 (5/15～27)
- ・ 世界スマイル計画4～チャッピー岡本のカブリモノとダンボール家具展 (6/19～7/1)
- ・ 奈良女子大学インターン学生による自主企画ワールド給食ツアー～世界の学校給食をのぞいてみよう～ (7/10～22)
- ・ 東日本大震災復興支援 こどもカメラマンプロジェクト「こどもカメラマン写真展～南気仙沼小学校編」(8/1～19)

- ・奈良から新しい提案！ リユースびん入り大和茶『と、わ (To WA)』容器グラフィックデザインコンペティション&展覧会 (9/11~23)
- ・古事記完成1300年企画展「やまとひとー神話に出会う旅」(12/4~27)
- ・奈良県立図書館情報館ITサポーターズ企画展「奈良の昔を探る Vol.6」(1/16~30)
- ・古事記完成1300年企画展「近世・近代日独文化交流における『古事記』ー書物と人間の運命ー」(2/1~27)
- ・「my home town わたしのマチオモイ帖」展 (2/26~3/24)
- ・「世界のブックデザイン2011-12」 (3/5~31)

(主な図書展示)

- ・「芸亭院と石上宅嗣〜「芸亭院」開創1250年記念」(5/2~13)
- ・「奈良を愛した二人のケンキチ」富本憲吉と杉本健吉(6/1~28)
- ・「ロンドン五輪開催ーイギリスへ行こう！」(6/30~7/29)
- ・「古事記の世界をよむー資料でたどる古事記の歴史ー」(8/1~9/27)
- ・「生誕150年ー人間鷗外の足跡を資料からみるー」(9/29~10/30)
- ・「祝 ノーベル賞受賞ー医学・生理学賞 山中伸弥氏／文学賞 莫言氏ー」(10/12~30)
- ・「デザインする愉しみ」(12/1~1/30)

★図書館から全国に発信！★



奈良県立図書館創立100周年記念書籍『読み歩き奈良の本』のほか、全国から若者が集まった「自分の仕事を考える3日間」フォーラムから生まれた西村佳哲（働き方研究家）著『自分の仕事を考える3日間I with 奈良県立図書館情報館』、『みんな、どんなふうに働いて生きてゆくのか？ー自分の仕事を考える3日間II with 奈良県立図書館情報館』そして、昨年12月にシリーズ最終刊『わたしのはたらきーwith 奈良県立図書館情報館』（弘文堂刊）が全国の書店で発売されています。また、昨年からはまった「シゴトヒトフォーラム」もその1回目が『シゴトヒト文庫1』として書籍化されました。今年度のフォーラムも文庫2冊目として発刊される予定です。図書館でのイベントから生まれたユニークな書籍が続々登場です。

(乾 聡一郎)

■編集後記

図書館は、今年8年目を迎え、この3月で入館者数が400万人を突破しました。開館以来、多くの利用者に支えられて、毎年コンスタントに約50万人の方に利用いただいております。

図書館としてのレファレンスや、公文書館としての歴史資料の保存、情報館としての情報発信、また、図書の展示や、ビブリオバトル、コンサートや講演会など多岐にわたるイベント等を開催しています。

これからも、想いをかたちにできる、進化し続ける図書館でありたいと願っています。

その軌跡の一端を、第5号でご紹介しています。



奈良県立図書館情報館報 うんてい

(うんてい復刊) 第5号

発行日 平成25年3月31日

発行人 千田 稔

発行所 奈良県立図書館情報館

〒630-8135 奈良市大安寺西1丁目1000

TEL.0742-34-2111 FAX.0742-34-2777